

国語

言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくり

国語の授業においては、育成を目指す資質・能力を明確にするとともに、児童生徒が言葉による見方・考え方を働かせながら言語活動に取り組むようにすることで資質・能力を育成していくことが大切です。そこで、言語活動を通して資質・能力を育成する授業づくりについて、随筆「空」（中学校第1学年）を例に二つのポイントを示します。

1 指導事項に即したねらいや、資質・能力を身に付けた生徒の姿を具体的に想定した評価規準を設定する。

<p>①本時のねらいの例 「空」を読んで、<u>表現の効果について、根拠を明確にして考える</u>ことができる。 〔思考力、判断力、表現力等〕 C(1)エ</p>	<p>②評価規準・評価方法等の例 文章中の<u>表現が、どのよう</u> <u>な効果をもっているか、根拠</u> <u>を明確にして意味付けしてい</u> <u>るかを確認</u>（ノート）</p>	<p>留意</p> <p>①は、該当する指導事項の文言（一部も可）に即して設定する。※下線部分 ②は、学習指導要領解説の内容を踏まえながら、資質・能力を身に付けた姿を授業者が具体的に想定する。※下線部分</p>
---	--	--

2 言葉による見方・考え方を働かせながら資質・能力を活用・発揮できる言語活動を設定する。

◎言葉による見方・考え方を働かせるとは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に注目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられます。

場面1 叙述における言葉の意味、働き、使い方等に注目して、表現上の工夫について気付いたことを個で整理する。

表現	言葉の意味、働き、使い方等
○際限もなく	○いつまでも続きそうだと感じたことを表現
○ひらひら・ひらひらと	○たくさんの雪が風に乗ってゆっくり落ちてくることを表現
○舞い降りて など	○舞っているように見えたことを表現 など

★言葉への着目の仕方（＝見方）に慣れることができるように、見通しの段階で授業者が見方についての例を提示すると効果的です。

場面2 表現の効果について伝え合う言語活動に取り組む。

視点例 表現を工夫することでどんな効果が生まれるか。

（「舞い降りて」を取り上げたときに想定される対話例）
S1：雪が「降る」だといろいろな降り方が考えられますが、何かにたとえると様子がイメージしやすいと思います。
S2：人の行動のように表すと、雪に意思があるみたいです。
T：でも人が「舞い降りて」くることはあるでしょうか。
→授業者による言葉の捉え直しを引き出すための揺さぶり
S3：それだけ雪の降り方が特別に見えたのでしょうか。
S4：筆者には神秘的に見えたから、その感動を伝えるための表現になっているのだと思います。
S2：比喻を使うことで、雪の様子だけでなく、見た光景に対して筆者がどう感じたかが伝わる表現になっています。

★表現の効果について捉え直すという思考（＝考え方）の経験や試行錯誤を通して、資質・能力の高まりを目指します。

資質・能力の高まり

生徒が言葉による見方・考え方を働かせながら思考できる叙述を授業者が教材研究によって想定し、自分の考えを伝え合う言語活動の場を意図的に設定することで、資質・能力の確かな獲得につなげていきます。

